

再生を信じて

西岡 正子

社会教育学科創設にあたって学科旗をと教育学科の美術担当の立岡甚雄先生にデザインをお願いした。無料で快く引き受けてくださった。平岡旗店から何度も打ち合わせに来てもらい Life Long Learning の二つの L の素晴らしい旗ができた。初代学科長の宮脇先生と共に若かった事務主任の私は、ばたばた走り回ったものであった。生涯学習学科への名称変更の際には、生涯学習の人生はバラ色と新しい学課旗の地の色をちょっと明るくした。今では超人的な忙しさの事務主任という役職はなくなったが、学科建設という仕事は楽しく充実していた。

学科を閉じるこの記念誌づくりは決して喜ばしい仕事ではない。山田先生が学科長としてこつこつ一人で作ってくださっている。ご苦労いただいているのが解っているが締め切りを過ぎても原稿が書けない。原稿用紙に向かうことが辛くて、悲しくてできないからだ。生涯学習学科が閉じられることが残念でたまらない。現実に向き合うことができない。昨年の謝恩会では、「みんなが社会で活躍している限り、生涯学習学科は永遠に不滅です」とにやかに言っていたのだが。

社会教育学科・生涯学習学科は実に「いい学科」だった。

学生達は「教師になるためにも、広い視野で教育を考えられる生涯学習学科がいい」と言ってくれていた。教育界は勿論様々な分野で卒業生は活躍している。いい先生ばかりで、学科運営もいいものであった。学生の教育、学生一人ひとりの将来を考えている先生方。情報を公開し全教員で共有し、学生の教育の充実のために学科会議は開かれていた。我々教員が学生・卒業生を自慢するように、卒業生の皆さんは生涯学習学科の先生方と学科そのものを、そしてそこに在学していた皆さん自身を誇りに思っていたきたい。

一九六五年のポール・ラングラン(Paul Lengrand)のユネスコにおける生涯教育提起に始まり、一九八〇年代の日本における「生涯学習体系への移行」に関わる様々な答申と施策、一九八六年佛教大学に日本初の社会教育学科創設、文部省に生涯学習局新設、一九九〇年生涯学習振興法公布、一九九二年ユネスコにおけるハンプルグ宣言、一九九九年生涯学習学科に名称変更と生涯学習の世界的潮流の中で生涯学習学科が存在した意義は大きい。またその学科で学んだ卒業生は生涯学習の歴史における貴重な存在である。社会教育学科・生涯学習学科で学んだという誇りと自信を持って今後も活躍していただきたい。

生涯学習時代に生涯学習社会の発展を担う人間をより多く輩出するために、生涯学習学科の再生が一日も早く望まれる。Education is concerned with "the real values of life, "with helping men" to live wisely and agreeably and well." (R. M. Hutchins, The Learning Society)

日本で家族のように過ごした研究室

～留学時代を振り返って

(平15生涯)

陳

莉

一九九九年四月一日、私は留学生として、佛教大学教育学部生涯学習学科に入りました。

紫野キャンパスの中には、成徳常照館、鷹陵館、一号館から十一号館まで各施設がありました。そこで授業を受けたり、本を読んだり、スポーツをしたりしましたが、中でも一番の思い出深い場所は、十一号館の五〇二号室です。

五〇二号室は西岡正子教授の研究室であり、私がよく日本人とコミュニケーションする場所でもありました。

西岡先生と初めて出会ったのは、一回生の授業でした。先生から教えて頂いた日本やアメリカなどの先進国の教育思想や教育現状については、中国で生まれ育った私には、初めての知識ばかりで、物事を考える視野が広がりました。

三回生になった時、西岡先生のゼミを選びました。私は十六人の学生たちの中で、一人の外国人として、皆さんに愛されました。当時、日本語がうまくできない私にとっては、皆さんの前で行うゼミの発表が、特に一番難しい問題でした。

先生は「陳さん、この問題について、どう思いますか。一言でもいいですから、日本語が間違っても、大丈夫ですよ。」と励ましてくれました。発表後、先生が日本語を直してくれました。その西岡先生の人を氣遣う心のありように触れ、とても嬉しく思いました。

ゼミの授業以外にも、パワーポイントやエクセルも教えて頂きました。その日は暑くて、また先生にとってはお休みの日でしたが、娘さんと一緒に五〇二号室に来てくれたのを今でも覚えています。先生は私たちにパワーポイントの使い方である「背景」「音声」「切り取り」など、いろいろな機能を説明してくれました。娘さんは、写真をとって、パソコンに取込む方法や自己紹介のパワーポイント資料の作り方を教えてくれました。出来た資料をスライドショーにした時は、まるでテレビを見ているようで、見た瞬間、嬉しくてたまりませんでした。このことは、今の私にとって、とても貴重な体験になりました。

私は現在大連の外資系の会社に勤めております。仕事は日本の日産自動車株式会社から委託されたものです。毎日、日本語で日本側のお客様とのやり取りをしています。業務では、パワーポイントとエクセルを毎日使っており、先生に教えていただいたアプリケーションの知識が、とても役に立っています。

五〇二号室では楽しい思い出たくさんありましたが、大変な日もありました。卒業論文と修士論文を書いている時期

は、徹夜までして、先生に「日本語の違和感があるか」、「文脈が一致するか」とか、赤ペンで目次から最終章まで直していただきました。翌日、先生は目が腫れていても「大丈夫です」と一言で済ませ、授業に入られていました。また、冬の寒い中では、私たちが少しでも良い論文を書けるようにと、先生は温かいおでんを注文して、差入れをしてくれました。今でも忘れられません。

いつ、五〇二号室に行っても、温かいお茶とお菓子を用意して下さっていました。西岡先生はお母さんのように私たちを愛してくれていました。

卒業式の日も、もちろん五〇二号室に全員集合して、写真を撮りました。

一面の本棚、机、パソコン……先生が私たちと一緒に研究する風景、今も記憶に残っています。また棚には緑の植物をズラリと配して、授業中の私たちを癒してくれました。

私にとって、五〇二号室は、六年間の留学生生活のなかで、忘れられない場所です。

いつか、日本に行けば、もう一度伺いたいと思います。



降雪の日の11号館入口